

---

# 勇者伝(作者はド三流)

忍冬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者伝（作者はド三流）

### 【コード】

N61690

### 【作者名】

忍冬

### 【あらすじ】

ある日カズヤは女神によって異世界に送られた。女神の言われたとおり魔王を倒すことができるのか

(前書き)

作者は三流ですのでよろしくお願いします

「はあ、はあ、はあ。」

ある部屋の一角で青いワンピースを着た少女が白いＴシャツをきて横になって腹部から血を出している少年の近くで叫んでいた。

「和哉！しっかりしてよ！和哉！和哉！」

「はあ、はあ、大丈夫だって、奈緒美、はあ、はあ、気にするなよ」少年、平賀 和哉は私立の中学に通う二年生で幼なじみの宮本 奈緒美の家でテストに向けて勉強をしていたのだが、突然侵入してきた強盗が持つていた包丁で奈緒美を刺そうとしたところを和哉が庇って強盗に腹を刺されてしまったのだ。

強盗はその後どこかに去っていき、部屋には腹から血を出した和哉と隣で叫ぶ奈緒美の二人だけだった。

「和哉しっかりしてよ、和哉」

「奈緒美、大丈夫だから泣かないでくれよ、おまえのせいじゃないんだぜ、笑ってくれよ奈緒美。」

「笑ってなんかいられないよ和哉」

泣き続ける奈緒美を見た和哉は

「奈緒美、突然なんだけどさ、俺お前のが好きだ。」

「ふぁい？」

「だから好きつつってんだろ、おまえのことが、好き、だって、気づいたらお前のが好きだったんだよ、だから笑ってくれよ奈緒美。」

「・・・私も好きだよ、和哉のこと」

奈緒美は少し驚いた様子を見せたが、笑顔になりいった。

「うれしいよ奈緒美ありがとうな、さよなら」

「和哉？ねえ和哉起きてよ、また好きっていつてよ、和哉あ！！！！」

そこで平賀 和哉は眠りについた。和哉が目を開けると、そこには家具もなにもなくただ白に統一された部屋だった。

「ここはどこだ？」

( ようこそ白銀の間へ、和哉様 )

「誰だ!？」

和哉が困惑していると突如和哉の背後に和哉と同じぐらいの身長で足まで届きそうな長い白い髪に白い服を着た少女がいた。

( 私は白銀の間の管理者、あなたは私がここに呼んだ )

「何で俺を呼んだ」

( あなたにある世界をある者から救ってほしい、見返りも払う。 )

「待て、世界を救うだと？俺にそんな力はないぞ」

( 力は私が授ける、簡単には死なないでしょう。 )

「なら見返りは何だ」 ( あなたが望むものを何でも )

「そうか、わかった受けるぜその件」

( ありがとうございます。では、あなたに四つの力を与えます )

管理者がそう言うのと和哉の周りに赤、青、白、黄の拳一つぐらいの四つの玉が現れ、和哉の体に入ってしまった。

「なんだこれは？」

( それは力の結晶、いずれ使えるようになる。しかし気を付けろ、力を使いすぎると反動がくる。 )

「わかった、自然と使えるようになるのか？」

( ああ、もういいか？ )

「ああそういやある者って何だ？」 ( いずれわかる )

「教えてくれないか、まあいいぜ」 ( では、最後に一つその世界にはお前の世界の情報が混じっている )

「はい、もうちゃちゃっとやってくれよ」

( では、武運を祈るぞ )

そう言うって管理者が腕をおろすと和哉は消えた。

「・・・よぶですか、あのーだいじょぶですか。」

和哉が目を覚ますと目の前に蒼き髪の少女がいた。

「うっ、此処は？」

「あっ、気がつきましたか、ここはデイリーの森ですがなんであなたはここにいるんですか？」 「俺は・・・」

和哉が喋っていると茂みから猪のような生物が出てきた。

「えっ、モンスター？」

「ブモツ！」

その声に気づいた猪は体をこちらに向けて前足で土煙を起こして少女に突っ込んできた。

「危ない！」

和哉は少女を突き飛ばすと突っ込んできた猪にひかれ数メートル転がっていった。 「きゃああー！」

少女が悲鳴を上げると猪が少女の方を向き、また砂煙を上げていく。

急に寒気が走り猪が振り向くとそこは

紫のオーラをまとった和哉がたっていた。

そしてあたりは漆黒に染まった。

「……の、生きていますかー、あの生きていたら返事してください。」

和哉がまた目を覚ますとそばにはさつき助けたと思われる青髪の少女がいた。

「うっ！君は？」

「あっ、目が覚めましたね。」

「そっだ猪は！」

あわてるように周りを見回すとそこには、横になってぴくりとも動かない猪がいた。

「えっ、も、も、もしかして、君がやったの」和哉がガクガク震えながら聞くと少女は笑顔で、

「なに言ってるんですか、あなたがやったんですよ」と言った。

「へっ？」

それが少年と少女の出会いだった。「さあ、どんどん食べなさい和哉くん」

「そうよ、遠慮なんていいから」

「ありがとうございます」その後俺は森の中にあるライフの家に行きギルさん（ライフ父）とラルさん（ライフ母）に歓迎された。ここまで歓迎されたので隠すこともないと思い俺は今までのことを話した

「なんだって！君は勇者なのか！？」

「はい、そうです」

「ならこの剣を持って行きなさい」

そう言ってギルさんは剣を渡してきた。

「これは我が家に伝わる伝説の剣、初代の勇者はこれを使い乱世を沈めたという」

「度々ありがとうございます」

「頑張ってくれ」

次の日朝早く俺は出かけた。

その後、勇者カズヤは魔王を倒しおとぎ話として伝えられました。

END

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます  
次回作の予定はありません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6169o/>

---

勇者伝(作者はド三流)

2010年10月31日15時12分発行